



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パースからミードへ : 行動と方法の問題
Author(s)	岡田, 雅勝
Citation	北海道大學文學部紀要, 17(2), 31-80
Issue Date	1969-11-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33334
Type	departmental bulletin paper
File Information	17(2)_P31-80.pdf



パ
ー
ス
か
ら
ミ
ー
ド
へ

—行動と方法の問題—

岡
田
雅
勝

パ
ー
ス
か
ら
ミ
ー
ド
へ

―行動と方法の問題―

岡
田
雅
勝

〔一〕

最初に、本稿の目論見を予示する言葉として、パースの『プラグマティズムとアブダクション』におけるつぎの末尾の一句をあげておきたい。

「すべての概念の要素は知覚という門から論理的思想に入り、合目的な行動という門から出ていく。この二つの門でパスポートを示すことができないものは、すべて理性によって許されないものとして逮捕されるべきである。」⁽¹⁾

『パースからミードへ』というわれわれの主題は、この言葉の導きにしたがつてすすめられる。そしてこの主題をつらぬくものは『行動と方法』の問題である。その問題に関して、われわれの探究の範囲は、いわゆるプラグマティズムの最も初期にあるパースと最も後期にあるミードにおける行動の意味とその方法に限られる。

ところで、わたしはプラグマティズムの特質を行動主義的観点と科学的方法との二つの側面から捉えることができる。と考⁽²⁾える。パースとミードの思想は、まさにこの二つの側面を特徴的にあらわしている⁽²⁾と考⁽²⁾える。知覚の世界に足がかりをおき、行動という門を通ることによって人間と世界を探究しようとしたプラグマティズムの二つの典型として、パースとミードをあげたい。

さらに、両者はプラグマティズム思想において二つの相補的な発展形態として捉えられると想定する。パースは科学的探究の方法の定式化をめざした。その定式化のために、すべての思考過程を記号による人間の行動として捉え、記号論をうちたてた。そして記号の関係をアブダクション、デダクション、インダクションという探究の三階段に分

け、その論理学をうちたてた。

こうした定式化において思考過程を行動との連関において捉えることは、われわれの行動がわれわれ自身とわれわれをとりまく環境との関係において捉える方向を示したのである。有機体としての人間とその環境との間の科学的な探究の方向がミードによつて、ワトソン、クリー、ロイス、ジェームズ、デューイ、ベルグソン、ホワイトヘッド等を介しながらすすめられていった。⁽³⁾

われわれは、『パースからミードへ』の主題を記号を通した行動の問題に焦点を置いて、追求していこうとするのであるが、その場合、かれらがそれぞれにとつた視点を、かれらが支えられていた学の根拠とその方法論の差異から特徴づけることができよう。おおまかにいうなら、前者は行動を数学的、論理的な方向からとりあつかひ、後者は生物学的、心理学的な方向から有機体としての人間の行動をとりあつかっている。両者の共通性と差異性から行動の意味をたずねるなら、プラグマティズムの最も初期の段階にあるパースから最後の段階にあるミードへの発展の方向が明らかにされるはずと考える。⁽⁴⁾

しかし、本論はプラグマティズムの歴史にはあまり関心をもたない。本論は、知覚の次元からみて、そこに、論理的な段階において斉一性を求めたパースの命題がミードへと発展的に受けつがれていったことに興味を抱くのである。

それゆゑ、本論の関心は、以上のことがらを念頭におきながら、行動と方法の問題に関するパースの発想からミードの発想への展開の根底となっているものをさぐろうとするのである。そしてそこから究極的にミードの方法の独創性を浮彫りにしようとするものである。

〔二〕

第一の命題、われわれは内省 (introspection) の能力をもたない。内的世界 (internal world) についてのすべての知識は外的な諸事実 (external facts) についてのわれわれの知識から仮説的に推論されることによって導きだされる。

第二の命題、われわれは直観 (intuition) の能力をもたない。すべての認識は以前の認識によって論理的に規定される。

第三の命題、われわれは記号 (signs) なしに思考 (thinking) する能力をもたない。

第四の命題、われわれは絶対に認識不可能なものを把握する能力をもたない⁽¹⁾。

これらの命題は、パースの反デカルト主義の立場から定立されたものである。以下、これらの命題を吟味し、パースの「行動とその方法」を考察したい。

(1) 第一の命題に関して

パースの主張は、「われわれの心のなかで生じるもの」について述べる命題を、「外界で生じるもの」を説明することに必要な仮説として認めることに限定すべきである、ということにある⁽²⁾。この主張は、自己意識を第一原理と考へる哲学にたいする徹底的な論駁を意図としている。デカルト主義の哲学は普遍的懷疑から出発し、そして「わたしが明晰に確信できるものはすべて真である」という確信から⁽³⁾コギトの存在を確証させるのである。

それについて、パースにはデカルト的な確実性がたし論証されうるのか、どうかが問題となる。

あらゆる命題は論証が可能であることによって真となる。論証が可能であるためには、厳密に検討可能な前提を必要とする。その前提となるものは、パースにしたがうなら、外界の事実からの推論である。パースは、「われわれは、知覚の法則を用いて事物の真の姿がいかにあるのかを、推論によって確かめることができる」、という。つまり、われわれは意識の内部から意識の存在やその構造を知るのではない、逆に、外的な諸事実にもとづく推論によつてわれわれは意識の存在を疑いえないものにし、そしてその構造を明確に知るのである。それゆえ、外的な諸事実をきわめて精確に反映する推論が、有意義な命題を導くのであり、意識を説明するというのである。

したがって、パースのデカルト批判は、デカルトのコギト・スムの命題が真の意味で論証されえない、ということにある。デカルトの懐疑は意識内から出発する。しかし、この出発においてデカルトの誤ちがある。「われわれは完全な懐疑から出発することは不可能なことである」とパースは言う⁽⁵⁾。われわれは現にもっている「偏見」(prejudices)から出発せざるをえない。その偏見をデカルトがなしたように、格率(maxim)で追い払うことは不可能である。それゆえ、「懐疑から出発する試みはたんなる自己欺瞞となり、決して真の懐疑とはならない」⁽⁶⁾。このように推論してパースはデカルトが出发点としたものを否定に導くのである。

さらに、パースはデカルトがうちたてた最後の疑いえない一点の根拠付けに批判の眼をむける。デカルトはコギト・スムの命題を「自然の光」(lumen naturale)に導かれて明晰・判明(clare et distincte)なものとして措定した。しかし、こうしたことからには、「神がそれをそのようにするとしなければ説明のしえない多くの事実が存する」⁽⁷⁾。つまり、デカルトは推論による検討のテストを受けないものを根底として命題の明晰・判明さを確信したというのである。

これらのデカルトの誤りは根本的に内観主義(introspectionism)がとられていることに帰因しているのであり、それゆえ、近代科学および近代論理学とまったく違った立場にデカルトは立っている、とパースは解するのである。

デカルト的な形而上学の殻を脱ぎすて、真理を探究する方法をパースは求める。そのために考えられたのが論理学である。論理学をうちたてることがかれの出発点である。かれは次のようにいう。論理学がわれわれに教える最初の教訓は、われわれの概念を明晰にする方法である。この方法がかれのいう科学の方法を示している。科学の方法による真理の探究が明晰・判明な命題をうちたてると主張するのである。⁽⁹⁾したがって、その方法は個人の意識内に求めらるのではなく、意識の外部から求められ、それゆえ、万人の批判に耐えうるものの獲得を目差しているのである。ここには、デカルトの現実性の究極的な吟味は個人の意識内でなされるという主張にたいするパースの批判があり、科学の方法で要請される真理の探究は哲学者たちの集団内における一致をめざしてのみなしとげられるというパースの見解があるのである。⁽¹⁰⁾

(2) 第二の命題に関して

デカルトは認識の最初の瞬間を想定し、その瞬間は直観によって得られるとした。パースにとってどんな対象を認識する場合にも、その認識の最初の瞬間などはないのであって、認識は必ず連続的な過程によって生じるのである。⁽¹¹⁾「われわれは、まず認識のひとつの過程、そして外界の諸事実を次々に把握する過程からとりかかる」。⁽¹²⁾認識は前提Aから結論Bへと進む正しい推論の過程(the process of valid inference)にほかならないのであり、結論Bは、前提Aが真であるとき、いつも真となる推論の過程にはかならない。このように結論するパースには、かれの論理学の課

題である探究の方法の確立が予想されているといえよう。実際、パースのデカルト批判の一連の論文には、「科学の方法」でつらぬかれた論理学の確立がめざされているといえよう。⁽¹³⁾

われわれは『信念の確定化』の論文において、探究の方法のひとつとして、ア・プリオリな方法をみいだす。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾

ア・プリオリな方法は偶然的な出来事から生じた結果をとり除き、概念の明晰化を提出する。その限り、この方法は氣持のよい結論を示す。実に、過去の形而上学的体系の基礎となつてゐる命題は、「理性にかなう」(agreeable to reason)かどうかによつて決められてきた。⁽¹⁶⁾「理性にかなう」ということは、経験との一致を意味しないで、信じた氣持になることを意味する。したがつて、この方法は偶然的な事例が起ることによつて破られる。科学の方法がそれにとつてかわる。フランシス・ベーコンのいう「眞の帰納」(true induction)⁽¹⁷⁾と同じではないにしても、觀察の事實にしたがつた科学の方法論が考えられる。パースにとつて、認識が成立するのは科学の方法にもとづく推論によつてである。その推論とは、觀察された事實にもとづいて既知の事實を整理し、吟味し、そしてその結果にもとづいて命題をうちたて、その命題から未知の事實を発見することを目的とする。この方法がパースのいう推論の指導原理の定式化につらなる。パースは次のようにいう。

「われわれは、ある前提が与えられると、それに應じて特定の推論をせざるをえないようになってゐる。……それが精神の習慣(some habits of mind)である。ひとつひとつの推論の仕方を個々の精神の習慣は命題の形に定式化できる。命題は習慣によつてきめられる推論が妥当であるとき、眞であり、妥当でないとき、偽である。そのような定式化を推論の指導原理(a guiding principle of inference)と呼ぶ」。⁽¹⁸⁾

ここで、パースの推論の指導原理を理解するために、パースの疑い(doubt)と信念(belief)の概念に注目してみたい。⁽¹⁹⁾

探究 (inquiry) とは「疑いが刺激 (irritation) となつて信念に到達しようとする努力」ということである。正しい信念形成のために推論の指導原理はもちいられる。ところで「疑い」と「信念」との区別をみてみると次のようである。まず、「疑い」の感じ (sensation of doubting) と「信じる」という感じ (sensation of believing) との区別がある。「疑い」の感じは問いを発したいというときの状態であり、「信じる」という感じは判断を下したいというときの状態にあるときである。つぎに、実際上の区別にあらわれるものであるのが、「信念」は願望 (desire) を導き、行動を実現させる。しかし、「疑い」にはそのようなことは決してない。最後に、「疑い」は落ち着きのない満されない状態 (an uneasy and dissatisfied state) であり、われわれがそこからのがれて信念のある状態にたどりつきたい状態にあるときである。「信念」は落ち着いた満足された状態 (a calm and satisfactory state) であり、信じているものを、さらにがんと信じている状態である。

両者のこのちがいは行動 (action) としてあらわれるか否かにある。「疑い」は、疑いがなくなるまで探究をつづけるように仕向けられているので、行動としてあらわれない。それにたいして、「信念」は疑いがなくなった状態にあるゆえ、行動としてあらわされるし、その可能性をもつ。信念形成にあたつて、まさに「疑い」が刺激となつて信念に達しようとする努力が始まる。⁽²⁰⁾ その努力は「疑い」がなくなると終る。そのとき、信念が確定された状態にある。ここでその努力の過程が行動というのではない。「疑い」のある状態にある限り、行動は不決断の状態にある。したがつて、「信念」に到達したときに、いかに行動すべきか決断されたときであり、そのときに行動がはいえるのである。推論の指導原理に課せられた目標とは、まさに「疑い」から「信念」の確定に、つまり「いかに行動するのか」を導くことにある。⁽²¹⁾

それでは、信念の確定とは一体何であり、行動とは何かが以下の命題の課題となろう。ここでは、さしあたって信念の確定が行動を導くものであり、また、そのことを通して、パースは習慣の確立をめざしていると答えておきたい。推論の指導原理はそのためにもちいられていると指摘しておきたい。実際、パースの探究の論理 (logic of inquiry) の要である帰納 (induction) 演繹 (deduction) 仮説 (hypothesis or abduction) としてそれから得られた推論を虚偽論 (wrong rule of inference) にかけるという一連の推論作用は、行動のための新たな習慣の確立をめざす精神作用 (mental action) にもとづいてなされている⁽²²⁾。

ともあれ、第二の命題に関して、パースの探究の論理はデカルト的な直観による瞬間的認識を否定し、われわれを科学的認識に導くようにもくろまれていてだてなのであり、パースが意図としていたものは、正しい行動の規則を導く信念の確立をめざすことにあつたといえよう。

(3) 第三の命題に関して

デカルト批判の立場から、第一、第二の命題をうちたてたパースが第三の命題に導かれることは必然であつた。探究の論理のてだとなるのは、まさに思考なのであり、思考以外に想定されえないというのがパースの見解であるといえよう。

さて、パースの問いは、思考とは何か、というのではなく、われわれは記号なしに思考しうるのか、ということである⁽²³⁾。われわれが外的な諸事実を明晰に捉えようとするなら、記号を伴う思考による。それ以外の方法での思考は、逆に外的な諸事実によって確証されえない、とパースはいう。つまり、思考は外的な諸事実を通してのみ認識される

ことを意味し、さらに、認識される思考は記号を伴う思考であることを意味する。そのことから、パースは、「すべての思考は必然的に記号を必要とする」⁽²⁴⁾という命題を定立する。この命題は、「思考は直観ではない」、「思考は瞬間的に生じるのではない」というパースの反デカルト主義の立場から定立されたものである。それゆえ、第二の命題においてみてきたように、ここでも連続的な手つづきがとられている。どの思考もそれにつづく何らかの思考をもち、そのどれをとりあげても、それに対応する事実をもっている。思考は、連続的な系列において想定されている。そのことから、さらに、パースは思考と記号との連関を次のように捉える⁽²⁵⁾。

思考の能力は「感覚と注意力（あるいは抽象能力）の二つの要素からなりたっている」⁽²⁶⁾という。この指摘は、まずわれわれの立つ場は、どんな意味でも知覚の現象から離れないことを意味し、そしてつぎに、そこに論理の働きがあることを意味する。この関係をもとにして、思考と記号との関係は、次のように考えられている。第一に、思考に表示をさせる表示作用（representation）、第二に、ある思考を他の思考との関係にもちこむ純粹の指示摘用（pure denotative application）あるいは実在的な結合（real connection）、第三に、素材的性質（material quality）⁽²⁷⁾、それはいかに感じるかを示し、思考の性質をきめる。それらに対応して記号の関係が考えられている。第一に、記号は記号を解釈する思考との関係をもつ。第二に、記号は思考において記号と等置させられる対象と関連をもつ。第三に、記号は素質に関して、対象との結合にもたらし⁽²⁸⁾、こうした思考と記号の連関から、パースは思考の機能を信念の形成にあるものとみなす。また、信念の本質は習慣の確立にあるのであり、習慣とは行動の規則にはかならない。つまり、「行動の習慣を形成することこそ思考の機能のすべてである」⁽²⁹⁾ということになる。

それでは、パースは習慣にどんな意味をもたせているのだろうか、パースは「思考とは何か」と問わなかったよう

に、「習慣とは何か」とも問わない。ここにパースの一貫したプラグマティズムの方法がある。その方法において、「何であるか」の問いは優先せず、「如何にあるか」がつねに問われている。それゆえ、習慣がわれわれを「どんな時に」、「どのような仕方で」行動させるかによって習慣の何であるかが答えられるというのである。「どんな時」(the when)に関しては、行動への刺激が知覚によって生じるといふ事実に着目し、「どのような仕方で」(the how)に関しては、行動の目的が感覚しうる結果を生み出すといふ事実に着目することによって答えられるといふのである。⁽³⁰⁾ このように、行動へのきつかけを与えるのは知覚であり、行動の目的は感覚しうる結果を生み出すことにあるといふのである。

以上のことから、われわれは本論の(一)で示したパースのことは、「すべての概念の要素は知覚という門を通じて論理的思想に入り、合目的な行動という門から出る」の意味をひきだすことができる。これまで示してきたように、思考↓信念↓習慣↓行動の過程は一連のつながりのなかにあるし、さらに、われわれはこれらの概念のなかに知覚↓論理↓行動というシエーマを内的な過程としてそれぞれのうちにもつものであるといえる。まさに、思考から行動へのつながりのなかに、われわれは知覚↓論理↓行動のシエーマを探究しているパースの記号論と行動主義の方法をみいだすのである。⁽³¹⁾

(4) 第四の命題に関して

パースにしたがうなら、われわれの認識は、記号を伴う思考による推論作用から導きびかれるし、記号は認識可能な領域でのみ意味をもち、その機能を果たすことができるという。それゆえ、絶対に認識不可能なものの記号は、パ

ースにとつてまったく意味をもたないのである。絶対に認識不可能なものは、伝達すべきいかなる概念をももっていないからである。⁽³²⁾ところで、パスにおいても、認識は「実在と観念との一致」⁽³³⁾として捉えられている。その場合、かれの認識論の対象となつてゐるものは、知覚↓論理↓行動という連続的な過程なのであつて、この過程から離れて、つまり非連続性において認識可能な基盤は決して与えられていない。その意味で、パスは絶対に認識不可能なものを把握しようとする試みを否定しようとするのである。⁽³⁴⁾

知覚↓論理↓行動の過程は連続的であり、その過程はそれに引き続く行動の過程へと連続的に展開する。そしてその過程のどの瞬間においても、われわれは認識をもつ。いうならば、認識は先行の認識から、さらに帰納と仮説により後行の認識へと推論作用の操作によつて連続的に導き出される。⁽³⁵⁾そのことは、ある認識がそれよりも以前のいつその特殊で、不明瞭で、無意識的な認識から、帰納と仮説によつて論理的に導きだされたものであることを意味する。⁽³⁶⁾また、この操作を逆にたどることによつて、先行の認識から、さらに先行の認識へとさかのぼることができる。そして無限にこの系列をたどつていくと、最後には、まったく無意識的である、観念的な最初のもの (the ideal first) に到達する。⁽³⁷⁾観念的なものによつて、パスが意味するものは、「可能なもの (the possible) が到達しえない限界」⁽³⁸⁾である。そして、「観念的な最初のもの」とは、「特殊な物自体 (the particular thing in itself) である」、⁽³⁹⁾といつて、パスは、この「観念的な最初のもの」がそれ自体で存在することを否定する。認識が成立するのは、つねに精神 (mind) との関係をもちうる限りである。この「観念的で最初のもの」も、精神との関係をもちうる限り存在しうるといえる。精神の正しい表示によつて、表示された実在が、実在 (the real) というのである。⁽⁴⁰⁾精神とは、パスによると、「推論の法則にしたがつて展開していく記号なのである」。⁽⁴¹⁾したがつて、

推論の法則は、外的な諸事実にもとづく推論作用から導かれ、その法則にしたがつて記号は「観念的な最初のもの」⁽⁴²⁾との関係をもつといえる。それゆえ、パースにとつて、この「観念的な最初のもの」は外的事実との対応をもち、決して虚偽とはならない。パースの記号論は、以上のことがらに根拠をもつといえる。

したがって、思考を記号として捉えることこそが、パースのデカルト克服の鍵である。パースは探究の論理学をうちたててだてとして、意識に帰せられた言葉をすべて記号として捉えようとする。それだけにとどまらず、人間をも記号として捉えようとする。それには、パースのつぎの確信がある。「すべての思考が記号であるという命題から、そして人間の生活が思考の連続であるという命題から、人間が記号であることが証明できる」⁽⁴³⁾。

この証明にさきだつて、パースは人間と記号との相違をあげる。この相違は、人間という記号 (*man-sign*) と言葉 (*word*) との対比で論じられる⁽⁴⁴⁾。その場合、差異性の特性として次の三つの側面をあげる。(1)、記号を構成する素材の性質、(2)、記号の指示能力、(3)、記号の表示能力。これら三つの側面において人間という記号の方が、言葉よりもきわめて複雑であるという点が強調されるだけであつて、それも程度の差にすぎないというのである。むしろ、両者は相關関係にあるといつていい。それゆえ、逆に、類似性の側面からみていつたとき、種々な点から、「人間が使用する言葉、または記号は人間そのものである」という結論に導かれるのである⁽⁴⁵⁾。というのも、言葉と人間とを対比させてみたとき、結局、「わたしの言葉の体系はわたし自身の総体である」⁽⁴⁶⁾としか結論しえないからである。

そこには、人間とは思考であり、思考とは記号であり、そしてそれらはそれぞれに対応する感覚物をもつということからくる推論作用があるのである。それゆえ、「行動の習慣を形成することこそ思考の機能のすべてである」ということには、人間の感性的存在の側面を生かしながら、なお、整合的な人間の未来の行動を探究しようとするパースの

目論見があるのである。パースがつぎのように人間の本质について語るとき、何故人間を記号として捉えようとしていたのかを了解できよう。「人間の本质 (identity) は、かれが行動し、思考するところのものの整合性 (consistency) にある。そして整合性とは、事物の知的特性、即ち、事物があるものを表示することである」⁽⁴⁷⁾。

以上のように、パースは、デカルト批判にさいいて、絶対に認識不可能なものを捉えようとするすべての能力を否定しようとした。そして、それについて、パースは外的な諸事実からの推論作用によってのみ明晰な認識を得るものとした。そのために探究の論理学をうちたてたのであり、その論理学の導きによって、信念の形成 (the production of belief) をもたらそうとしたのであり、そして行動の規則をつくりあげ、未来にたいしての合目的な行動を自己制御にもたらそうとしたのである。⁽⁴⁸⁾

ところで、パースは『プラグマティズムと批判的常識主義』の論文で、「思考することは一種の行動である」⁽⁴⁹⁾という。すでにみてきたように、思考にも、行動にも、それぞれ感覚物との対応が考えられている。しかし、この命題の意味は、つまるところ、思考における行動を指しているようである。行動が思考を規定するのではなく、思考が行動を規定するといっている。その意味で、パースは人間の行動を思考の論理的構造の反映としてとらえていると結論することができよう。

また、このことを考えていくとパースの知覚↓論理↓行動の構図は、実は徹底的な現象主義をつらぬくことにあるのではなく、われわれはそこを必ず通らなければならないといっているのであって、パースが行った一連の推論作用は、知覚を越えて、現象一般の構造を明確にとらえようとしているといえよう。明確にとらえられたその地点から、人間の行動は未来へむかって開かれるという。そこには、人間が理性的に（思考の論理的構造を反映したかたちで）

行動する場としての理性の国がある、とパースは考えているようである。⁽⁵⁰⁾ 行動をとりあつかうにあたって、知覚に手がかりをおきながらも、整合性を求めてやまないパースの手つづきの底にある何かを、われわれは垣間見ることができるのである。しかし、これまで考察してきたことから、すくなくとも、現象に足がかりをおいて、科学の方法で行動を探究しようとしたパースの姿をえがきだすことができよう。

(三)

パースの反デカルト主義の立場からうちたてられた前述の命題はミードへと受けつがれる。その受けつがれ方は、同一の方向を構図として示すものであるが、パースの立つ視点とミードのそれとは異なっているといわなければならぬ。それゆえ、パースからミードへの思想の発展の過程のなかに種々な差異性がうみだされている。そして結果としてうみだされた思想はミード独自のものとして結実されていることをみいだすのである。本章は、前章でとりあつかった四つの命題をミードのとつた方向と照らし合せながら、パースがうちたてた命題の根拠をさぐり、そして両者の差異性を指摘することを意図としている。

(1) 第一命題からの受けつぎ

パースはデカルト的な内省の能力を否定した。そのことはデカルト的な自我の形而上学的な存在を否定するものであった。この点に関して、パースとミードの見解は基本的に同一である。「自我はもはや意識のデカルト的な前提で

はない」とミードは主張する。⁽¹⁾意識内の存在から演繹的に自我を説明しようとする主張にたいして、ミードは徹底的反対の立場をとる。ミードは科学の方法にもついた観点から自我を説明しようとする。⁽²⁾その意味では、パースのいう「すべての精神作用を外的な事実からの仮説的な推論」によって説明しようとする態度を受けついでいる。

(1)・1、しかしながら、出発点において両者の支えられているものは異なっていた。

そこには、プラグマティズムの最も初期にあるパースから最も後期にあるミードにいたる歴史的発展の経過が考えられよう。⁽³⁾しかし、ここでは、それぞれの思想的展開の成果に限って考察することとしたい。

既にふれているように、パースは科学の方法の探究の論理を求め、それにしたがって、デカルトを克服しようとした。論理学の法則の妥当性の根拠にもとづいて明晰な認識を得ようとするのであった。この方法はかれのプラグマティズムのマクシムで生かされる。そこに、パースが数学および論理学を確実な学としてかれの方法の根拠に考えていたことが認められよう。⁽⁴⁾それにたいして、ミードは同じく科学の方法を求める。哲学と科学の方法は同一視される。しかし、メカニク的な科学 (mechanical science) にたいしては批判的である。「科学は進化的である」ということを標榜し、科学のダイナミックな発展こそ真の科学の在り方として受け入れられるべきであると主張する。⁽⁵⁾それだからこそ、数学や論理学をもととして哲学を問題にするよりも、何よりも生物学の成果を基礎とすることによってかれの思想は成り立っている。⁽⁶⁾ジェームズがそうであったように、またデューイが初期において心理学の研究に没頭していたように、ミードの出発点は心理学にあった。⁽⁸⁾意識の存在を第一義的に認めようとする立場にたいするミードの批判は、生物学の成果に支えられた心理学の研究から進められているといえよう。⁽⁹⁾

(1)・2、ミードはまず何よりも有機体の存在を認め、有機体の行動から出発する。⁽¹⁰⁾デカルトが懷疑しえない一点を

コギト・スムに求めたのにたいして、もしデカルト的な表現をするなら、懷疑しえない一点は有機体としての人間の行動であつた。意識の内部から認識の根拠を説明するのではなく、逆に意識とは、あるいは認識作用とは、行動から発生したものであるという発生論的観点に立つて、行動の意識にたいする優位性を説く。有機体としての人間の行動は社会的な行動である。社会的行動の過程のなかから意識が発生してくる。⁽¹¹⁾ その場合、人間が有機体として生理学的構造 (physiological structure) をもつということは重要な意味をもつ。ミードにとつて、すべての有機体は、それぞれ社会的な生命過程のなかにおかれる。したがつて、発生論的見地に立つて、人間の意識活動の特徴付けているものは、他の有機体との区別からみるなら、まず、人間は、高度に複雑に組織化されている社会的過程のなかにおかれるということ、そして人間特有な生理的構造をもつているということである。

以上のミードの見解は、まさに反デカルト主義の立場にある。第一に、意識を発生論の立場で説明すること、第二に、人間が社会的有機体 (social organism) であることを認めることによって、意識をたんに個人のものに帰するのでなく、社会的な過程の産物とする。第三に、デカルトの身心二元論に対して、身体をもつ有機体の行動で精神を説明する⁽¹³⁾。といつても、パースの反デカルト主義の場合と異なっている。C・モリスの表現によると、両者は「デカルト主義のさまよえる横道の根、(roots of lingering traverse)」をたちきつた。⁽¹⁴⁾ 両者は意識を知覚の現象の粹内にひきおろし、そのなかから思考の普遍性、行動の一般性、そして諸法則の客観性をひきだすことを目的とした。その意味でわれわれが認識を得るといふことの手がかりを両者は外的な事実から求めていった。

しかし、その場合、パースは論理的分析をもととして、概念の明晰さを求め、思考の法則をみいだそうとして探究の論理学をうちたてた。それにたいして、ミードは有機体の行動をもととして、社会的行動の過程から社会的行動主義

パースからミードへ

をうちたてようとした。

ここに、両者の行動についての了解の相違がある。パースにおいて、推論作用の過程が終えたところにはじめて行動があらわれる。ミードには、意識活動、あるいは認識作用のあらゆる過程が行動として受けとられている。この相違を両者の根拠とする学からくる方法の相違として受けとることができよう。そして、さらにパースからミードへの流れは、行動を説明するにあたって、静的な方法(static method)から動的方法(dynamic method)への推移としてとらえることができる⁽¹⁵⁾。このことは以下の課題となる。

(2) 第二の命題からの受けつき

パースのいう直観の能力による認識作用の否定はミードも同様である。ベルグソンの哲学に賛美をおしかなかったミードも、ベルグソンがエラン・ヴィタール *élan vital* を語る根拠を直観に求めたという点において、ベルグソンの立場を非科学的であると非難した⁽¹⁶⁾。直観による認識を排して、ミードは科学的方法によって認識の問題をとりあつかおうとする。

ミードの講義『十九世紀における思想の運動』のテーマは科学の方法と結びついた思想史をとりあつかっている。そこにおいて、ミードは「哲学は科学である」といった信念で首尾一貫している。そこでいう科学の方法とは、「まず現象の観察なのであり、そしていままで法則としてみとめられたものから例外を発見することである」⁽¹⁷⁾。そしてさらに、例外がどのように解決されるべきかを吟味し、その問題に解決されるべき共通の理論(*common theory*)をうちたてるためには、すべての様相において当の問題が吟味されなければならないとするのである。仮説はその意味で試験

的であるのであり、それは検証をへることによって、はじめて仮説として定立される。その仮説は、さらに、他のものによって検証されたときに、法則として定立される。だが、そのときでさえ、法則はあくまでも仮説としてとどまる。法則は、つねに他の例外の事例から新たな法則をうちたてられることを必要とされているからである、⁽¹⁸⁾ といふのである。

ミードのこうした科学の方法論について、とりたてて論議するほどのこともないのかも知れない。むしろ、この方法は科学者がたてまえとするところであつて、ミードの仮説構成の論理については特別な展開があると想定されないのかも知れない。しかし、問題なのは、かれの思想が、心理学的、生物学的見地にもとづいて徹底的に展開されているといふことであり、しかも、その展開の仕方にかれ独自のダイナミックな方法がたらぬかれていますといふことである。パースが推論の指導原理を定式化するにあたつて「疑い」(doubt)と「信念」(belief)の二つの関係において行動を捉えようとしたことについてはすでにのべた。

ミードはパースのいう「疑い」から「信念」に到るパターンの過程全体を行動で説明する。その場合、科学者の立場を動物の行動になぞらえて次のように説明する。「動物がなしていることと科学者がなしていることは同じことである」⁽¹⁹⁾。例えば、動物がある問題に直面するするとき、その問題に直面して動物は新しい状況 (situation) に自からを調整 (adjust) しなければならない。その場で、ある行為をなしとげるために、その動物はいままでとは異なつた新しい要素を選択 (select) する。そのときに、そこに、それを阻止 (check) するものがあらわれる。ある方向にむかうと他の方向が開かれる。あることを求めようとすると他のことをさけなければならない。このちがいが闘争 (conflict) となる。このちがいが再構成 (reconstruct) されるまで、その行為は停止状態にある。その動物が自己の習性を再構成にもたらず唯一のテストはひとつの行為をつづけることである、といふ。

このように、パースの「疑い」から「信念」に到る過程の論理構造が、ミードの有機体の行動によって説明されることによって、変化してくる。パースの行動は推論作用を根本的に前提している過程として説明される。その意味では、論理上の、あるいはそれからくる行動の整合性を求める方法がとられる。そこから、わたしは、パースの方法は静的な科学の方法であると名付けたい。それにたいして、ミードのは動的（ダイナミック）な科学の方法と名付けたい。というのは、いま例で示したように、個がある問題に直面して、その問題を解決する行為の過程のなかで、個自体の内部に、その状況との関係において変化がおこっている。その変化は、もはや、以前の行動のあり方とはちがった質的な変化を自己の習性のなかにとり入れているということである。行動は推論作用によって導かれるのではない。有機体とその環境との具体的な生活状況のなかから規定されている。つまり動きのなかに、有機体の発展の過程のなかに行動は捉えられる。その行動から有機体の認識する行為が説明される。「知ることは調整の過程である」⁽²⁰⁾、「認識は有機体のその環境にたいする選択的態度（selective attitude）の発展であり、そのような選択にしたがう再調整（re-adjustment）なのである」⁽²¹⁾という。それゆえ、パースの第二の命題との関連からいうなら、ミードは先行の認識とそのまた先行の認識との間にパースのような論理的整合性をもちこまない。前件と後件との事象の間での因果関係が予想されている事象内で、つまりニュートンのな空間時間内で、あるいは空間化された関係において論理的整合性はいええ、とミードは主張する⁽²²⁾。しかし、有機体の行動として認識を捉える限り、両者の間の論理的整合性はいえない。というのも、ミードは有機体の行動を発展の、あるいは進化の過程として捉えているのであって、そうである限り、二つの事象の間には、前件になかった何か新しいものの出現（emergence）⁽²³⁾が起ることが予想されているからである。認識とは新しいものの出現にたいしての調整の過程である。したがって、パースは認識行為を連続性においてみているが、ミ-

ドの場合には、連続性も考えられと同時に非連続性が同様に考えられているとしなければならない。そこには、ゲーウィ
ン、ラマルクの進化論の影響をみのがすことはできない。しかし、パースにしてもかれらの影響を受けており、それが『
進化的愛』、『精神の法則』等の論文にあらわれている。このことを考慮するとき、かれらの影響をミードだけに帰せ
られない。その受け入れにあたって、パースはカントが純粋理性批判でとった方法に準拠し⁽²⁶⁾、ミードはロイスの影響⁽²⁷⁾
もあつて、ヘーゲルの精神現象学と法哲学との方法に準拠したと考えられる⁽²⁸⁾。この差異が静的な方法と動的な方法と
してあらわれたのであろう。

以上のことがらにもとづいて、第二の命題からパースとの差異性をミードの「新しいものの出現」(emergence)
の問題と動的な科学の方法の問題としてひき出すことができる。

(3) 第三の命題からの受けつぎ

パースとミードとの最も共通な問題は記号論の展開にある、とわたしは考える⁽²⁹⁾。(二)で示したように、パースが記号
をもちだした経過は、知覚↓論理↓行動のシエーマとして総括され、その過程において記号論と行動主義とは、結
びつけられている。

パースの思考を記号とみなす立場は構図としてミードへと受けつがれているといえる。ミードは有機体の意識的行
為(思考も含めて)を記号やシンボルで捉える。その意味でミードの場合は、パースよりは一層密接に記号と行動と
は結びついているといえる。ところで、パースの記号論をミードのそれと対比させるまえに、(二)でとりあつかわな
った諸点をかれの他の論文との関係からみて、かれの記号論を支えていたものをはつきりさせたい。

(3)・1、パースのうちたてた第三の命題から導かれて、われわれはすべての思考は記号であり、精神とは推論の法則にしたがって発展する記号であることをみてきた。その意味で、精神はシンボルの過程 (symbolic process) と分離な状態にあるといえよう。また、この第三の命題が適用される範囲を現象にみてきた。つまり、内的世界をも外的世界からの諸事実をもとにして仮説的に推論しうるものであるという結論を受けてきた。この意味では、記号の過程もその現象内に限られるものとして受けとることができよう。

ところで、パースは論文「細部にわたるカテゴリー」⁽³⁰⁾において、「記号は記号が産み出す観念にたいしてあるもの (something) を表示する。つまり記号は外からあるものを精神に運びこむ運搬具 (vehicle) である」⁽³¹⁾と記している。「外から」といった場合、無論、外界を指すことができる。ところで、運びこまれる精神とは一体何であるのか、われわれがみてきた現象内の人間の精神に、つまり有限な精神に限っていいのであろうか。パースは『必然性の教説』⁽³²⁾において、精神を最終因 (final cause) の働きとして想定し、精神を宇宙的な性格 (cosmic character) に拡張、そして精神を「存在の泉」 (fountain of existence)⁽³³⁾とする。さらに、『学の詳細な分類』⁽³⁴⁾において、「精神は最終的原因 (final causation) によって働く。そして最終的原因は論理的原因 (logical causation) である」⁽³⁵⁾とする。もしそうであるなら、もはや精神は単なる有限な精神にとどまるのではないし、したがって、外から精神にあるものを運びこむ記号は、単なる外的な事実を運びこむものでもない。この考え方の背後にパースの實在に関する見解のあることをどうしても見逃がすことができない。

ファイブルマン (Feibleman) のつぎの指摘、「パースの語る實在とは、プラトニックなイデアの観念界において存在するものであり、現実の世界は純粹なものであったとしても、それは観念界の断片 (fragments) にすぎない」⁽³⁶⁾

ここに、われわれは(二)の最後のところで、垣間見たものの正体をつきつめることができる。「外とは」、究極的にこの実在からくるのではないか、記号が精神に伝えるものはその永遠な真理なのではないのか、と。パースは『連続性の論理学』において、⁽³⁷⁾「存在している宇宙は、……イデアの世界、プラトンの世界からのひとつの流れである」とのべる。そうであるなら、「外から」とは、もはや知覚が伝えるものを意味しない。普遍的な法則を求め、逆に、その普遍的なものが記号を通してわれわれの精神に伝えられる。論理の手づきから普遍性を求める論理的實在論と、そしてプラトンのイデアの想定である觀念論とは、パースにおいて結びついているといわなければならぬ。⁽³⁹⁾それゆえ、われわれは、パースのデカルト批判が、実はプラトンの觀念界を求める形而上学に由来していることを理解するのである。

ここに、パースがかれの哲学の根底に数学および論理学の普遍性をもちこんでいる一連の方法をみいだす。推論の指導原理をうちたてることも、探究の論理学をうちたてることも、さらに諸法則を求めることも究極の最終目的としてプラトンの實在論の擁護者として、パースは自からの立場を基礎付けたのである。パースの立場は、まさに形而上学的觀念論(*metaphysical idealism*)を根底としているといえよう。

(3)・2、パースは自からうちたてた法則を觀念的で、永遠な真理(*ideal and eternal verities*)と呼ぶ⁽⁴⁰⁾、そこでかれが考える人間の精神の現象も、その永遠不変な過程の二つの事例となる。だが、かれがプラグマティズムのマクシムでのべるものは経験的理論の枠組のなかにある。こうしたことの矛盾は、C・モリスの「かれは自らの方法的マクシムにしたがって行動するのにしばしば失敗した」という主張からもうかがえる。⁽⁴¹⁾

ところで、ミードには、パースにみられるような形而上学的觀念論の傾向はまったくない。むしろ、ミードの努力は、『十九世紀における思想の運動』においてみられるように、形而上学的思惟の、あるいはドイツ觀念論のもつ形而上

パースからミードへ

学的なもの、被いをはがしていくことにあり、哲学の中味は科学の成果を受け入れることにあると主張でつらぬかれている。つまり、ミードは科学者の立場に立って自らの見解をのべようとする。したがって、パースからミードへ受けられるものは、パースの形而上学的観念論にあるのではなく、パースがうちだした科学の方法でつらぬかれるプラマティズムのマクシムなのである。

C・モリスの「ミードはこれらのことがらに関して（プラグマティズムに関して）あまり多くのことを書かない。しかし、かれの思想はより確固としてプラグマティックで経験的な軸のなかで働く」という表現は、ミードの評価になり重要な意味をもつ。というのも、パースの「プラグマティズムの問題はアブダクションの問題にはかならない」というマクシムが現象の枠内に定立される限り、ミードにはパースのマクシムが意味をもつからである。ミードは、行動主義の心理学を自己の立場とする以上、どうしても状況において問題解決にあたるといふ方法をつらぬくのであり、その意味では決して現象を越え出ないのである。

(3)・3、以上の両者の差異にもとづいて記号論は考えられなければならない。

ミードの記号論は『精神、自我そして社会』において展開されている。ミードが記号論を展開するのは、われわれの意識内の事象をどのように科学的に説明するのかという問題に直面したときである。意識を実体として、最初から想定するのではなく、有機体の領域において、しかも、客観的に観察しうる行動の観点から捉えようとするときである。すでにあつてきた推論作用にもとづいて記号論を展開した、パースとミードとの記号論をつなぐ何人かの人をとりあげることができよう。⁽⁴⁴⁾ そのなかで、この問題に心理学の見地から、しかも、行動主義の見地からアプローチした典型としてワトソンをあげたい。⁽⁴⁵⁾

ワトソンは、心理学の研究を観察しうるものに限って、その範囲内で法則をうちたてようとした。その場合、観察しうるものとは行動であった。ワトソンは、動物実験とか幼児の観察の成果をもととして、意識内の全領域を外的な行動で説明した。ワトソンは徹底した行動主義者の立場をつらぬく。つまり、かれは、「精神」とか「意識」の観念を誤りとして葬り、すべての意識現象を条件反射（conditioned reflex）あるいは物理的なメカニズムに帰するのであった。ワトソンは、刺激（stimulus）と反応（response）との条件反射でもって、思考や意識等を、ことは、シンボル、音声身振り等と同一視した。⁽⁴⁶⁾ パプロフの条件反射の影響を受けたこの行動主義の心理学は、たしかにミードへの道を示したのであった。

ワトソンの行動主義にたいして、ミードは自分の行動主義の立場をつぎのように主張する。⁽⁴⁷⁾ 第一に、ワトソンは意識活動のすべてを外的な行動によつて説明する。そのことによつて、有機体としての個の内省（introspection）の問題を残していった。⁽⁴⁸⁾ それにたいして、ミードは有機体の行動は単に外的な行動だけにあるのではなく、内的な有機的な行動（internal organic conduct）にもあると主張する。つまり、有機体としての個は、それぞれ生理学的な構造をもつ存在なのであって、行動を組織化する中枢神経系も大脳皮質の働きが身体の内部で行われているということ、それに伴つて他者の観察の対象となり得る諸々な意識が生じているのであって、そのような行動の内的な局面をも観察可能なものへともたさなければならぬ、と主張する。第二に、ワトソンは個の行動を社会的行動の産物からきり離している。⁽⁴⁹⁾ それにたいして、ミードのいう行動は、どんな意味においても社会的行動の相互活動の客観的現象であり、個の行動は決して社会から抽象されない。個の意識、思考は社会的なものの反映されたものであると主張する。つまり、個に先立つて全体の優位を説く。第三に、ワトソンは徹底的な行動主義を主張することによつて、有機体としての個を

物理的環境のあやつり人形 (puppet)⁽⁵⁰⁾ のようにあつかう印象を与える。その意味では、個を、または個の内的な経験を否定する。そればかりではなく、精神や意識の存在をまったく否定する⁽⁵¹⁾。それにはたいして、ミードは有機体としての個が環境に働きかけ、環境を規定していく側面を認める。その意味で、個の主體的な役割を尊重する。また、精神や意識の存在を否定するのではない。それが精神的実体 (psychical entity) として存在することを否定するのである⁽⁵²⁾。

パースが定めた思考 (すべての意識活動を含めて) を記号とみなす問題は、ワトソンの行動主義心理学を経てミードへと受けつがれていった⁽⁵³⁾。思考を記号として捉えるにさきだつて、ミードは有機体の協働 (co-operation) による社会的行動を前提とする⁽⁵⁴⁾。行動の社会的組織化の問題に関して、ミードが最も強く影響を受けたのは、ダーウィンの進化の問題からであり、クローリーの社会心理学⁽⁵⁵⁾ からであり、ヘーゲルの社会のダイナミックな発展の方法論からであった⁽⁵⁷⁾。

(3)・4、さて、それらを媒介としてミードはつぎのように行動と記号の問題を考える。

ミードは記号を発生論的に捉える。有機体と環境との間における行動の過程のなかから刺激と反応との関係において記号は捉えられる。その場合、記号は「意味をもたないシンボル」 (non-significant symbol) と「意味あるシンボル」 (significant symbol) とに分けられる。前者は自然記号 (physical sign)、身振り記号 (gesture sign) に分けられる。後者は言語記号 (language sign) である⁽⁵⁸⁾。(一) 飢えた動物が食物を前にし、(二) それを刺激として食物をとらえ、(三) 食べるという自然記号。(一) 二匹の犬、A・B がいて、A が B に攻撃しようとする、(二) それに刺激となつて B は A になんてある反応をとる、

(三) そのとき A の態度に変化がおきる。ここに身振り記号があり、身振りの会話 (conversation of gesture) がある。

いずれの場合も、記号は有意義なものとならない。前者の場合は、食べる欲望を満す行為にすぎない。後者の場合は、相互に身振りによる会話があつたとしても、両者の身振りには共通な意味が存在しない。Aの身振りがBの身振りに別な意味を伝える可能性がいつもあるからである。

有意義な身振り、またはシンボルは人間の行為にあらわれる。動物と人間との相違は、第一に生理学的構造の相違にあるのだが、動物の身振りは、音声を伴うにせよ、そうでないにせよ、外的な会話にとどまり、相手の態度を内面化する内的な会話がないうことである。人間の身振りには、身振りを内面化（internalization）すること、つまり相手の態度（attitude）を自分の内的な会話（internal conversation）によってとらえなおすことができる⁽⁵⁹⁾。その意味で、人間による身振りが有意義なシンボルなのである。その有意義なシンボルで代表されるのが言語記号である。（一）ある人が他者に話したとする。その話された言葉は、（二）それが刺激となつて他者に反応をよびおこす、（三）そのとき、当の話をしている人が自分の声を聞くので他者の反応と同じような反応が自分におこる。つまり、共通の意味をもつ言語記号を通して、互に相手の態度を自己のうちに内面化して、共通の対象あるいは目的にむかつて行動することができ。その意味でこの記号は有意義なのである⁽⁶⁰⁾。さらに、ミードは思考、意識そして精神もこの有意義なシンボルで説明する。

「有意義なシンボルとしての身振りによってのみ精神または知性（mind or intelligence）の存在が可能である。というのは、有意義なシンボルである身振りによってのみ思考——それはそのような身振りの内面化された個の自らの会話である——は生じうるからである⁽⁶¹⁾」。思考は社会内にある個の行動が個の内面へともたらされることによる内面化された会話である。つまり、内面化された会話が得られるのは、一定の社会内において有機体の行動の刺激と反応

とから得られた共通の態度を取得することによってである。したがって、他者の役割を自己のなかにもたらしことによって共通な意味を取得することが、コミュニケーションをもたらしているのであり、コミュニケーションが可能となるとき思考が生じるのである。この内面化された会話が、言語としてあらわれ、そして言語過程の発展したものが意識や精神として捉えられる。つまり、有意義なシンボルの発生と存在にともなう、意識、精神等の発生と存在が想定されるのである。この手づきは思考のそれと同じである。⁽⁶²⁾

(3)・5、以上のように、ミードは発生論的観点にたつて、行動との連関において、記号を考え、思考の本質を有意義な記号とみなした。それゆえ、ミードの記号による思考の説明は、パースのそれと内容においてまったく異なった方向をとっているといえる。しかし、それにもかかわらず、記号を捉えるパターン、そして記号を思考とみなす手づきにおいて、パースのそれと類似している面をひきだすことができる。それはまず三分法 (trid) にみられる。⁽⁶³⁾ ミードにみられる三分法はつぎのようである。

記号の三分の問題——自然記号、身振り記号、言語記号(有意義な記号)であり、そして記号を説明する行動の三段階——行動の始めの段階(記号の説明のとき、(一)、(二)、(三)で区別してきたように、例えば、(一)飢えた動物が食物を前にするとき)、行動を操作する段階(二)食物を刺激として、それに反応して食物をとろうとする過程)、行動の完了の段階(食物を食べ終えるとき)——が想定されている。⁽⁶⁴⁾ このことは、パースが、記号を三分法によって、とりあつかうのに対応する。記号の三つの種類——アイコン(icon)、インデックス(index)、シンボル(symbol)——そして記号の三つの要素——記号(sign)それ自身、記号が表示するものの対象(object)、解釈者(interpreter)における結果である解釈項(interpretant)——がそれである。⁽⁶⁵⁾

さらに、パターンの類似的の側面として、記号論を考えるにあたりミードはその根底とするものを社会的なものとなした。それによつて、パースは記号の働きを有限な精神の働きにとどめず究極的に永遠不変なものを根底としている。この違いはあるにしても、両者は何かを根底として、つまり、類似なパターンでもつて記号論を展開しているということである。

ここに、パースからミードへの発展の意味をみることができる。記号の区分と記号をとりあつかう手続には、たしかに類似なパターンがみいだされのであるが、記号論そのものにおいては、かれらが、それぞれの根拠としていたものによつて、まったく異なつた内容が展開されている。パースからミードへの道は徹底的に形而上学の志向を捨てて道であつたといえる。例えば、ミードのカントからヘーゲルにいたる研究は、かれらのとつた科学的な方法の問題に向けられていた。⁽⁶⁶⁾ このことはプラグマティズム思想の発展過程にたいしても同じであつた。したがつて、記号論についてのパースからミードへの道はつぎのような対比で総括されるであらう。

つまるところ、パースの記号論は「精神を存在の泉」(the fountain of existence)とするかれのオントロジー(ontology)から由来している。⁽⁶⁷⁾ まさに、かれがデカルト批判に立つたその地点から、つまり形而上学的な根拠から、かれの記号論がなりたつてゐる。その意味でかれのデカルト批判は自己矛盾におちいつてゐるといつていいであらう(無論、パースとデカルトのとつた手続きの相違—前者は外的事実から、後者は意識から—があげられるであらう。しかし、両者は明晰・判明な認識を求めていつて、その根拠を形而上学的なものにしたのである)。反デカルト主義から定立された命題は知覚↓論理↓行動のシエーマからおしすすめられている。逆に、かれの記号論はそのシエーマの領域を出たところ、つまり、理性の国から由来している。「最高度の實在は記号によつてのみ到達される」⁽⁶⁸⁾、といふのは、記号は究極

的には、プラトンの観念界から實在を精神のなかに運びこんでいるからなのである。

パースは、實在の理論を考えるにあたって、存在の様態 (the modes of being or existence) として形而上学的カテゴリーを想定した。それに対応して現象のカテゴリーを想定した。さらに、それに対応して記号が想定されている。この上下の秩序を支えているものはかれの形而上学であるといえる。それゆえ、記号はかれの形而上学から想定されているといえる。それに反して、ミードは知覚↓論理↓行動のシェーマを越えない。記号の、そして行動のトリアド (triad) は、このシェーマにそっており、この枠内でつねに記号が規定されている。このことはパースが (二) において定立した命題の枠内にあることを意味する。

(4) 第四の命題からの受けつき

第三の命題から生じてきた差異性はパースとミードとの立場を大きく分けてしまった。というのも、既にみてきたように、パースは自ら定立した命題を現象の枠内にとどめず、むしろ現象を越えてたところに、その命題の根拠を求めたからであり、それにたいして、ミードは現象の枠内にとどまったからである。その意味で、ミードこそ、パースの命題、つまり、「絶対に認識不可能なものを把握する能力をもたない」という方向にそっていたといえる。

もともと反デカルト主義の立場でかかれた論文は、パースの初期に属するもので、かれの論文集 (Collected Papers) 全体との関係からみれば当然差異があるわけである。したがって、第三の命題の吟味から、第四の命題をもちこむことは矛盾するように受けとられるのかも知れない。しかし、パースの認識についての了解の仕方が二通り考えられる。知覚↓論理↓行動というシェーマで現象に足がかりをおいたものと、観念界に永遠不変な真理を求めて、逆に、現

象を説明していくという二つの方向である。いずれの方向から認識を問題にしても、パースはその明晰・判明さを求めていった。つまり、その手つづきの論理的整合性をもって、パースは、「絶対に認識不可能なものを把握する能力をもたない」という結論を導きだすのだと考えられる。

だが、このようにパースのうちたてた第四の命題を解釈してもなおかつ疑問がのこる。それというのも、パースには、整合性を求めるあまり形而上学的傾向が⁽⁷⁶⁾つねに強くただよっていることである。つまり、かれの手つづきはつぎのように受けとることができる。「あるものは、ほかのものよりもよい」、ということから、絶対的によいものがなければならぬことをひきだし、「ある理論はほかの理論よりは真である」、ここから、絶対的に真である理論があることをひきだす。また、「様々な目的を含んでいる目的がある」、ということから、すべてのものがそれへと向って働く最終目的があることをひきだすのである。

それについて、ミードは認識の次元を知覚の世界あるいは物理的世界においてみる。そして科学者の眼をもってそれに対処する。その処置の仕方には形而上学的傾向はみられない。相対的な認識を求めるにとどまる。したがって、ミードはパースの第四の命題にそっているといえる。

(4)・1、両者の第四の命題にたいする了解は以上のように考えられる。両者の了解にはいまのべてきたような差異があるが、さらに、両者の差異性を特色付けけるものとして、わたしが考えるものは「行動」にたいしての両者の見解である。それでは、パースのいう行動とは何か、第一に、パースは走るとか、歩くとかの外的行動を考えていたことは事実である。第二に、人間の知覚内の種々な活動に行動を考えているようでもある。しかし、第一、第二の場合、いずれも思考の過程に適用され、したがって、第三のに、それらが包括される。第三のは、「思考は本質的に行動であ

る」ということであらわされる。このことをパースの意図とした行動として受けとることができよう。⁽⁷²⁾「思考は本質的に行動である」ということは、行動によって思考が導かれるというのではなく、思考が行動を導いていくことを意味する。また、このことは、「行動の習慣は思考の機能からうみだされる」⁽⁷³⁾、ということを導く。この目的にそぐわないものは、たとえば思考とのかかわりをもつものでも「単なるおそなえもの(accretion)」⁽⁷⁴⁾としてしかとりあつかわれない。つまり、思考は行動への指針を示す。どのような指針を示すのかというのは推論の指導原理に求めることができる。すでにみてきたように、そのことは「疑い」から「信念」への探究の過程にあらわされる。行動は「疑い」がなくなつて「信念」となつて確定されたときに定まる。思考は信念の確定に働くのである。その信念が確定されたところに、行動の規則があり、習慣がある。それゆえ、思考の整合性の徹底さの度合において行動の規則の度合も定まってくるといえる。パースのつぎの指摘、「信念は行動のための規則なのであり、行動の規則の適用はさらに疑いをよびおこし、思考をよびおこすので、信念は思考にたいしての終着点(stopping place)⁽⁷⁵⁾であると同時に出発点(starting place)⁽⁷⁶⁾でもある」⁽⁷⁶⁾、「人間の本質は、かれが思考し、行動するところの整合性にある」⁽⁷⁶⁾というとき、たえずよりよい行動の規則を求めていく人間の合目的な行動が想定されているといえる。

知覚↓論理↓行動のシエーマの領域内に思考の機能の目的があつた。しかし、かれはもはやその領域にとどまらない。かれにとつて、理性的に行動するとは、自己の思考と行動とを整合性へともたらすことであり、それと同時に、未来にむかつて行動を合目的に自己制御することである。⁽⁷⁶⁾かれの推論作用は、究極的に人間の行動の整合性を求めることにある。そのために、その手つづきを保証してくれる最終因としての永遠なる形相を想定した。その場合にさえ、かれの方法は連続的な推論の手つづきでつらぬかれていくといえる。それゆえ、どんな意味においても、パースのいう行動

は推論作用の枠内にあり、思考の論理構造の反映として受けとらざるをえないのである。

(4)・2、それについて、ミードのいう行動とは何であるのだろうか。知覚↓論理↓行動のシエーマを、ミードの言葉におきかえるなら、知覚↓操作↓行動といつていいであろう。ミードの場合、論理に第一義的に強調がおかれるのではない、広い意味で論理的な手づき、全体として論理を想定するのなら、パースのシエーマもミードへと受けつがれよう。しかし、内容的な差異性をこのシエーマはうみだしてきている。そこで、わたしは論理のかわりに操作を入れてミードの行動を考えてみたいと思う。

操作とは、刺激と反応との操作の手づきを意味するし、また仮説構成のための一連の手づきを意味する。ここで、パースの探究の論理学にたいして、ミードの発生論的観点が強調される。つまり、パースのシエーマは論理的手づきによる行動の規則をつくりあげることにあるのについて、ミードはパースのシエーマそのものを行動の過程としてとりあつかおうとする。そこには、ミードの徹底した現象主義がある。そして科学の方法とは、行動主義をつらぬくことである、というミードの了解があるといえよう。したがって、ミードの思考は、既にみてきたように、パースのそれとは異なる。ミードの場合、思考は行動の、それも有機体としての全体が個に優先するという協働 (co-operation) による行動の過程のなかから発生してくる。つまり、パースとは逆に行動が思考を規定する。行動が高度に複雑化すれば、それに応じて思考形態も変ってくる。思考の法則によって行動が生みだされるのではない。思考の法則（それが数学や論理学を基礎としている場合）は、メカニク的な法則であって、静的な方法 (static method) で行動を捉えるのでしかない。パースの命題で示された構図が、ダイナミックな方法でもって展開されていくところに、パースからミードへの発展があると考える。ミードにとって、探究とは論理的整合性を求めることではない。つねに新たに起る事例にたちむか

って、そこにその事象を説明する法則を求める。その意味で、その方法は単に論理的ではなく、広い意味での論理の、そしてつまるところ、科学的操作の過程といわなければならない。⁽⁷⁷⁾したがって、「科学は進化的である」⁽⁷⁸⁾という見解には、行動を進化の、発展の過程において絶えずとらえなおすことが要請されている。その方法に準拠している限り、形而上学の建設の努力は徒勞となる。むしろ、過去の哲学の体系のなかから、形而上学的な被いを一枚、一枚はがしていく作業のなかから、われわれの進む道が開かれてくるといえる。ミードの強調点は、われわれの有機体としての行動こそがわれわれを導くということにある。

〔四〕

前章で、われわれは、パースの四つの命題をミードのつた方向と照らし合せ、パースからミードへの発展の方向と両者の差異性とを考察してきた。そこから、さらに、両者の違いをうみだしているものの根底をさぐってきた。また、それらの考察の過程において、ミードの思想を特色付けるものを指摘しておいた。それは行動主義とひとつになつてゐる科学の方法であり、しかも有機体の生命過程にそくしてとらえるというダイナミックな方法であつた。

本章において、さらに、その方法に焦点を合わせることによって、ミードの獨創性をあきらかにし、そしてパースからミードへの「行動と方法」の問題にしめくくりをつけておきたい。

(1)

ミードは社会的行動主義を根底として、かれの行動論を展開していった。わたしは社会的存在としての人間の行動をとらえるミードの方法にかれの獨創性をみる。わたしはかれの獨創性を次の三つのものにおいて見ることができると考える⁽¹⁾。第一に、役割取得の問題である。社会的存在としての人間の行動を広く役割取得の過程においてとらえていくということである。第二に、三分法の問題である。有機体の行動のすべての過程を三段階においてとりあつかっている。それはメカニク的な三段階の区分ではない。そこには有機体の生命過程にそくしたダイナミックな方法がとられている。第三に、時間論の問題である。有機体の行動は空間的・時間的なパースペクティブのなかにおかれている。そのパースペクティブにそくして有機体の行動をとらえていくということである。

これら三つのものがひとつの行動の探求の過程のなかに織り込まれている。そして三つのものを一体化するところにかれの方法の獨創性があると考ええる。それでは、次にその方法を考察してみたい。

(2)

われわれは有意義なシンボルとしての言語過程から意識・精神等の一連の精神作用をなすものの出現をみてきた。それらのものは、外的な行動を内面化する過程のなから出現する、つまるところ、刺激と反応との関係から他者の態度を自己のなかに取得する過程において出現する。われわれはそのことを行動のトリアドの関係においてみてきた。ところで、さらに、ミードは自己形成にさいして、他者の態度の取得、つまり他者の役割取得 (taking of the role of others) の三段階の過程において自我 (self) をとらえる。その三段階の過程を「プレイ」(play)、「ゲーム」(game)、「そして」「一般化された他者」(the generalized others) としてあらわす⁽²⁾。この三つの段階は子供の發展段

階になぞらえて説明される。

プレイにおいて、子供は、ままごととか、インディアンごっこをして母親とか、お客とか、あるいはインディアンの役をする。つまり、ワーズワースが「かぎりなき模倣⁽³⁾」と呼んだ子供の時期がある。その遊びにおいて、子供は、かれの社会に属するものの役割を絶えず獲得している。つまり、子供は自分自身の社会的行為にたいする反応を自からのうちに絶えずひきおこしている。ある規則にしたがって遊ぶ場合がゲームである。そこにおいて、子供は他者の役割を取得するのみならず、ゲームに参加しているすべてのものの諸々な役割を受けとらなければならない、そして事態に応じて自分の行為をとりきめなければならない。子供の行動の範囲が拡張されると、かれが属する社会集団の、つまり組織化された社会の役割を引きうける。そのことが「一般化された他者」の役割取得である。「一般化された他者」の態度をとることは、個が、かれの属する社会集団の、つまり有機的に組織化された社会の態度をひきうけることである。「個にかれの自我として統一を与える組織化された共同体 (community)、または社会集団は一般化された他者と呼ばれる」⁽⁴⁾。

この過程はわれわれがすでに見てきた思考発生の過程と同一視される。意味あるシンボル、言語、自我等は、社会的行動を根底とした刺激と反応による他者の態度取得の過程のなかからとらえられる。それらはひとつの有機的なつながりのなかでとらえられる。そこには、言語、思考、自我へと統一がもたらされるまでの発展の過程があるといえる。有機体として個と環境との相互作用の過程で、絶えず新しいものの出現に出会い、その都度それを選択し、調整していく闘争の過程から言語、思考、自我等へと統一がもたらされていくのである。⁽⁶⁾

ところで、「一般化された他者」は組織化された社会の総体を反映しているといえる。その意味で、「一般化された他者」は「因襲的な、慣習的な他者」⁽⁵⁾ (conventional, habitual individual) ということになる。それが高次に複雑

に発展したものが「一般化された社会の態度」を取得する制度的な個（institutional individual⁽⁷⁾）である。

(3)

このように「一般化された他者」としての統一を個に与えられたものが自我のすべてか、というところではない。ミードは自我を構成する二つの要素あるいは局面として、*me*と I とを想定した。⁽⁸⁾ *me*はいまのべた「一般化された他者」に相応する。 I はその*me*にたいしての反作用である。*me*は、対象化され、客体化されたものとして、様々な他者の役割を自己のなかへと内面化している。それにたいして、反作用するものである I は、対象化、または客体化されないでつねに不確定なものとしてある。⁽⁹⁾ I は *me* に新しさの要素をもたらし、*me* に反作用する。その意味で、 I は自由と自発性を意味する。⁽¹⁰⁾ 自我において、*me* と I とは相関関係にある。両者は、働きの過程において分離されるが、全体として統一されて自我を構成する。 I と *me* との両方の局面はどんな意味においても自我にとって欠くことができない。⁽¹¹⁾ ところで、 I 、*me*、そして自我（self）のトリアドにおける構造をダイナミックな方法との関係においてとりあげてみたい。

I は決して予知されない、不確定なものである。この I の局面が、*me* に反作用し、自我のなかに何か新しいものの出現（emergence）をもたらし⁽¹²⁾。ここで刺激と反応との関係において、新しいものの出現にさいして絶えざる闘争が自我のなかでおこなわれる。つまり、 I である新しいものの出現によって自我自身の絶えざる分化と統合化がなされる⁽¹³⁾。自我に I と*me*との間に緊張関係があるとき、それが新たに高次に組織化された自我へと統合をもたらし、自我

自身が發展していく。しかし、緊張關係を失つて、「と me とのどちらかが一方的に肥大したとき、自我は分裂し、崩壊にみちびかれる。ところで、自我はひとつの自我だけではない。社会そのものが自我として想定されている。したがって、個々の自我の分裂には、やがて統合化へと再調整されるような社会的な制御 (social control) が働く。⁽¹⁵⁾ 無論、この社会的な制御には、進化の見地がとり入れられているので淘汰 (selection) の問題が考慮されている。

つまり、ミードにしたがうのなら、有機体の生命過程には、絶えざる淘汰があつて、分裂からやがて統合化へと再調整されるような社会的な制御があるというのである。分化、統合化いずれをもたらずにせよ、「が、何かあるものを自我のなかにもたらずと、それはもはや I ではなく、me となる。I と me にはつねに時間の契機が伴なっているからである。I の瞬間、瞬間が me に刻まれていく。me はまさに、一瞬時前の I なのである。⁽¹⁶⁾ 自我はこの両局面をもつて、ひとつの社会的過程を遂行する。⁽¹⁷⁾ この複数の異つた自我の統合が社会である。そしてその社会はまた I と me との両局面をもつて、同様にひとつの過程を遂行する。社会が社会的有機体 (social organism) として生命過程を遂行しているというのである。⁽¹⁸⁾ さて、ミードが行動を進化の、あるいは發展の過程においてとつた方法は、いまのべた自我のとりあつかいに行れるように、トリアドにもとづくダイナミックな方法である。そのダイナミックな方法を次のようにまとめることができる。つまり、行動を科学的探究の対象として、「過程」 (process)、「發展」 (development)、「新しいものの出現」 (emergence) のなかで対処しながら、しかもトリアドの關係において捉えていく方法なのである。⁽¹⁹⁾

(4)

ミードがこの方法をとるに到つた背景を様々な過去の思想との、あるいは科学との關係からひきだすことができよ

う。

例えば、ヘーゲルから弁証法の問題、ダーウィンから進化の問題、ホワイトヘッドから有機体の哲学等々⁽²⁰⁾。しかしながら、かれらからの影響は事実あるにしても、時間的・空間的なパースペクティブにおかれた有機体の生命過程にたいして、そのパースペクティブにそくした方法からアプローチする態度をミードはつらぬくのである。このパースペクティブにそくして問題解決にあたるという方法は、ミードの時間論にもつともよくあらわれている⁽²¹⁾。

ミードの時間論は、「實在 (reality) は現在 (present) において存在する」という命題であらわされる⁽²²⁾。過去 (Past) も、未来 (future) も現在に位置をもつという意味からきている。つまり、現在において過去と未来がつねに仮説的に構成され、あるいは再構成されているという見解を展開する⁽²³⁾。ミードがある出来事を時間にもちこむのは観察者によって引き受けられる出来事に限られる。観察者の位置が必然的に時間的・空間的なパースペクティブのなかにおかれることによって、その出来事はかれの時間的・空間的なパースペクティブにおいて問題とされるからである。したがって、過去は実在的な過去そのものとしてあつかわれぬ。過去は新しいものの出現 (the emergent) が、そのなかで現われている現在において構成されるというのである。

ところで、ミードは「未来はいやしがたく偶発的 (incurably contingent) である」⁽²⁴⁾ という。このことは、さきほどとりあつかってきた自我の二つの局面、「I」とMeとの関係でとりあげることができる。未来はMeによって決して完全に予知されえないものである。Meによって予知された未来はつねに「I」の働きによって、くつがえされ、変えられる。だが、その瞬時、「I」の働きはMeに吸収される。「I」の局面は直接的に観察されないが、反省において、つまり、meの見地から観察されうる。換言すれば、「I」は現在である me において編み込まれるひとつの「I」なのである。した

がつて、「は *Be* において存在するといえる。以上の説明にみられるように、未来には新しいものの出現が絶えず現われることが予想される。また、新しいものの出現が予想されるのは、現在において構成された過去とのかかわりからなのである。「すべての未来の新しい (*novely*) はひとつの新たな過去を要求する」⁽²⁵⁾ という。つまり、未来は現在において絶えず過去を変えていつているのであり、未来は現在において位置をもつことによって、過去を新たな見地から絶えず再構成するのに手助けしているというのである。

以上のように、ミードは自らを観察者の位置において実在を現在の地点から捉えようとする。現在において過去と未来とを構成しようとする手づきには、新しいものの出現にたちむかつて、それを絶えず再調整していかうとするミードの一貫した態度がうかがわれているといえよう。この手づきのなかに、わたしは、ミードが行動をとらえている方法をみるのである。

有機体の行動はつねに時間的・空間的なパスpekティブのなかにある。その有機体の行動を社会的進化の、あるいは発展の過程においてとらえようとするとき、パスのような連続的な論理の手づきではなく、非連続的なものの絶えざる出現に処するダイナミックな方法がとられざるを得なかったのである。さて、社会的なものとしての有機体の生命過程は絶えず現在にくみ入れられ、その現在から未来にむけられている。有機体の行動には、未来にたいして何らかの目的論的な志向があるといわなければならない。ミードのいう目的論的な志向とは有機体による環境を規定していく側面である。⁽²⁶⁾

ここで、ミードの時間論の見地を考慮するなら、過去も未来も現在に位置をもつ。そのことは社会的な有機体の行動にも適用される。社会的な有機体が過去の時間的・空間的なパスpekティブにおいてもっていた組織 (*system*

）と未来の組織が現在において位置をもつことを意味する⁽²⁷⁾。その意味で、社会的な有機体は、社会的な実在を現在においてもつのであり、有機体の生命過程は社会的なものの現在におかれる⁽²⁸⁾。この現在において、古い組織と新しい組織との両方を同時にもちつ状況がある。この状況を社会性（sociality）とミードは名付ける⁽²⁹⁾。それらの組織を現在において位置づけるながらも、新しいものの出現に絶えず出会われる現在の状況で目的論的な志向をするとするならば、それは如何なる意味からいっても、相対的なものにとどまざるを得ないであろう。時間的に絶えず規定された、この相対主義こそ、「行動と方法」の問題を通してみられるミードの立場であるといえよう。それゆえ、この時間的な相対主義（temporal relationism⁽³⁰⁾）の立場で、ミードはパースの定立した四つの命題を展開したといえよう。そこで、われわれがこれまで考察してきたものをつぎのように結論することができよう。

パースは思考と行動の整合性を求めるあまりに、自ら定立した四つの命題を相対的なものととめず、絶対的なものにいたるまで探究をつづけた。その意味で、パースは自らその命題に反していったといえよう。それにたいして、ミードはこの命題に徹したといえる。この命題を社会的な有機体の生命過程にひきいれ、その状況にそくして、その命題を展開していったといえよう。その展開の方法は、本章のはじめにあげた三つのものに、要約される。そしてそれらが有機体の社会的行動の探究において具現化されているのである。ここに、パースの命題のミードへの展開の意義がある。つまり、ミードは、パースの命題を受け入れるのにあたつて、知覚、あるいは現象の次元から、自らの力動的な方法でもって、具体的に、しかも厳密に、社会的な存在としての人間の行動をとらえようとしたのである。

註および引用註にそきだつて、ペースおよびミートの死後編集出版された著書として次のものをあげたい。そしてペースよりの引用は本書による巻数とペラグラフ・ナンバーで示し、ミートよりの引用は括弧内に示した略号に頁をそえる。

- Charles Sanders Peirce (1839-1914).
Collected Papers of Charles Sanders Peirce, edited by
C. Hartshorne and P. Weiss, 8 vols. 1960.
George Herbert Mead (1863-1931).
The Philosophy of the Present, edited by A. E. Murphy,
1932.[PP]
Mind, Self and Society, edited by Charles W. Morris,
1934.[MSS]
Movements of Thought in the Nineteenth Century, edited
by Merritt H. Moore, 1936.[MTNC]
The Philosophy of the Act, edited by Charles W. Morris,
1938.[PA]

[1]註

- (1) Peirce, Pragmatism and Abduction, op. cit. 5.212.
- (2) cf. Mead, MTNC. pp.344-359.
- (3) 『MTNC』においてミート自身の思想形成の過程をのべているものゝみはすくなくである。なお、C・モリスが『MS

S』の序論でミートの思想形成の過程をのべている。

- (4) cf. T. L. Blau, Men and Movements in American Philosophy, 1952. pp. 228-273. Charles W. Mooris, Six Theories of Mind, 1932, Chapter VI. Mind as Function, pp.274-330.
- (5) ペースとミートの比較はわたしの知る限り、C・モリスの次の論文しかない。
C. M. Morris, Peirce, Mead and Pragmatism, The Philosophical Review, vol. XLVII, pp. 109-127.

[2]註

- (1) Peirce, Some Consequences of Four Incapacities, op. cit. 5. 265. この論文はAnti-Cartesianismの立場でかかれたものである。同じくペースのAnti-Cartesianismの論文を手がかりにこの章の考察はすすめられる。
Questions Concerning Certain Faculties Claimed for Man, op. cit. 5.213-5.263. Grounds of Validity of the Laws of Logic: Further Consequences of Four Incapacities, op. cit. 5. 318-5. 357. これらの論文はいずれも一八六八年のJournal of Speculative Philosophyに連続して出されたものである。
- (2) Peirce, op. cit. 5.266. 5.244-249.

(3) *ibid.* op. cit. 5. 264.

(4) Peirce, op. cit. 5. 384. *The Fixation of Belief*, *Popular Science Monthly*, pp. 1-15 vol. 12. 1877. op. cit. 5. 358-5. 387.

この二つはデカルトの『省察』省察 に対応するものと考へる。 cf. Descartes, *Meditationes*, VI.

(5) (6) (7) Peirce, op. cit. 5. 265.

(8) *ibid.* op. cit. 5. 244ff. cf. Peirce, *Issues of Pragmatism*, *the Monist* vol. 15, pp. 481-499. op. cit. 5. 462.

(9) Peirce, *How to make our ideas clear*, *Popular Science Monthly*. Vol. 12, pp. 286-302. op. cit. 5. 394.

(10) *ibid.* 5. 265.

(11) *ibid.* 5. 259-262. (12) *ibid.* 5. 267.

(13) 前述の *The Fixation of Belief*, *How to make our ideas clear* の二つの論文においてよりあげたものを参照

(14) (15) *The Fixation of Belief*. 5. 358-5. 387. それにおいて探究の方法として次の四つをあげる。

Ⅰ 固執の方法 (method of tenacity. 5. 379) Ⅱ 権威の方法 (method of authority. 5. 380) Ⅲ ア・プリオリな方法 (a priori method. 5. 383) Ⅳ 科学の方法 (method of science. 5. 384)

(16) (17) *ibid.* 5. 383. (18) *ibid.* 5. 383.

(19) *ibid.* 5. 370-5. 373. (20) *ibid.* 5. 374-5. 376.

(21) cf. H. G. Frankfurt, *Peirce's Account of Inquiry*, *The Journal of Philosophy*, vol. 55. 1958. pp. 588-592.

(22) cf. Peirce, op. cit. 5. 274-283. cf. 2. 466. なお

hypothesis との abduction 関係について次の参照

H. G. Frankfurt. *Peirce's Notion of Abduction*, *The Journal of Philosophy*. vol. 55, 1958, pp. 593-597.

(23) Peirce, op. cit. 5. 250. (24) *ibid.* 5. 314.

(25) 前述の *Concerning Certain Faculties, Consequences of Four Incapacities*. この論文はペースの記号論の基礎をなすものである。したがって、ここで獲得された立場は、のちの pragmaticism として semiotic に発展するものである。J. J. Fitzgerald はここで定立された命題はペースの生涯を通して主張されると指摘する。 cf. J. J. Fitzgerald, *Peirce's Theory of Signs as Foundation for Pragmatism*, 1966.

(26) Peirce, *ibid.* 5. 294. (27) *ibid.* 5. 290.

(28) *ibid.* 5. 283. (29) *ibid.* 5. 394.

(30) *ibid.* 5. 400.

(31) C. W. Morris, *Signs, Language and Behavior*, 1955, pp. 287-291. それにおいてかれはペースの全体の見地からみて、ペースが現象主義を彼の記号論にもちこむことと異論をとる。しかし反デカルト主義の論文にたいして記

号現象に十分な説明をしたものとみなしている。つまりフィッシャーの解釈とは異なる。

- (32) Peirce, op. cit. 5. 254-255. 5. 310.
- (33) ibid. 5. 310-311.
- (34) cf. James K. Feibleman, An Introduction to Peirce's Philosophy, 1956, chapter V. pp. 196-214.
- (35)(36)(37) Peirce. op. cit. 5. 311. (38)(39) ibid. 5. 311.
 以上、ペースがカントの純粋理性批判を強く意識している
 点を見出す。つまり物自体と現象との関係がペースのなか
 に変容されているといえよう。
- (40) ibid. 5. 311. (41) ibid. 5. 313. (42) ibid. 5. 311.
- (43) ibid. 5. 314. (44) ibid. 5. 313. (45) ibid. 5. 314.
- (46) ibid. 5. 314. (47) ibid. 5. 316.
- (48) Peirce, What Pragmatism is, the Monist, vol. 15. pp. 161-181. op. cit. 5. 417.
- (49) Peirce, Pragmatism and Critical Common-Sensism, op. cit. 5. 534.
- (50) (1)で示したペースの『アラクマライズムとアダクシオン』のことは、知覚→論理→行動を越えて、理性の領国へと
 なる道を暗示しているといえよう。

〔三〕論

- (1) George Herbert Mead on Social Psychology, Selected Papers, edited by Anselm Strauss, p. 297.
- (2) cf. David Victoroff, G.H. Mead sociologue et philosophe, 1953.
- (3) cf. Morton White, The Origin of Dewey's Instrumentalism 1943. T. L. Blau, op. cit. pp. 228-273.
- (4) cf. J. K. Feibleman, op. cit. pp. 32-77.
- (5) Mead, MTNC, p. 168.
- (6) C. W. Morris, Introduction, PA. p. xi. cf. C. W. Morris, Logical Positivism, Pragmatism and the Scientific Empiricism, 1937. p. 4.
- (7) M. White, op. cit. p. 37. その当時の研究は次のものに取
 り込まれる。cf. The early works of John Dewey 1882-1892 Psychology, 1967..
- (8) 一八九四年の Die moderne Energetik in ihrer Bedeutung für Erkenntnis Kritik. に始まって、一九一〇年代まで殆んど心理学関係の論文を發表している。それは社会心理学へいたる研究の過程として受けとることが出来る。
 cf. L. Victoroff, op. cit. Bibliographie, pp. 141-144.
- (9) ペースの思想のなかに生物学的・心理学的なものが入りこん

ていることは事実である。しかし、J・K・ファイブマンの指摘「ベースは心理学が第一義的な研究であると主義しなかった」(J.K. Feibleman, op. cit. p.25.)は当を得ているようである。ベースが学の体系を考えるにあたって、カントの純粋理性批判の方法に準拠したことは知られているが、ベースの学の分類において、心理学が精神の現象を研究したり、知覚そのものをとりあつかうのであっても心理学は論理学に依存するものである(Peirce, op. cit. 2.210)また生物学は理論的学問において、Diосcopy の一分枝にすぎないし、実践的学問においてもpsychical sciencesの一分枝にすぎない。ibid. 1.180-1.202: 1.243

- (10) cf. Mead, MSS. pp. 1-pp. 35.
- (11) ibid. p. 1. (12) ibid. pp. 115-117. 中枢神経の働きが人間の精神活動を生じさせていることの主張である。
- (13) W. WundtのParallelismに対する批判からそれがうかがえる。デカルトにたいする直接的な批判はあまり見られない。cf. MSS, pp. 31-2. pp. 109-17. pp. 110-11. Merritt H. Moore, MTNC, Introduction, p.xiii.
- (14) C. W. Morris, Peirce, Mead and Pragmatism, op. cit. p.112.
- (15) ミートは MTNC において科学の方法のstatic method からdynamic methodへの発展として「カントからヘーゲル

ルへの発展」「mechanical scienceからbiological scienceへの発展」を考えている。それとのアナロジーにおいて、ミートでとりあげた。

- (16) MTNC. pp.321-322. (17) ibid. p.264.
- (18) ミートの科学の方法について以下参照
MTNC. p.143. p.168. p.264ff. p.285. p.286.
- (19) ibid. p.346. (20) (21) ibid. p.350.
- (22) ibid. pp. 37-42. p.331. (23) cf. PA. pp. 539-540.
- (24) MTNC. chapter III, Evolution becomes a general idea.
cf. Richard Hofstadter, Social Darwinism in American Thought, 1944. VII. p103ff. Victoroff, op. cit. p.10.
- (25) Peirce, The Law of Mind, 6.102-163. Evolutionary Love 6.287-306. これはいわゆる Tychism, Synechism and Agapism に関する論文である。
- (26) K. J. Feibleman, op. cit. p.32.
- (27) Victoroff, op. cit. p. 1. 10
- (28) C.W Morris, Introduction (MSS. pxiii). ミートはロイスについて Josiah Royce-A Personal Impression, International of Ethics, XXVII (1917), pp. 168-70.
ヘーゲルに関しては「MTNC」に記述されている。

- (29) ペースとミートとの共通問題として記号論を積極的にとりあげたのは C. W. Morris である。cf. C. W. Morris, *Signs, Language and Behavior*, op. cit. C. W. Morris, Peirce, Mead and Pragmatism, op. cit.
- (30) Peirce, *The Categories in Detail*, op. cit. 5.300-353.
- (31) *ibid.* 5. 339.
- (32) Peirce, *The Doctrine of Necessity*, op. cit. 6.35-6.65.
- (33) *ibid.* 6. 61.
- (34) Peirce, *Detailed Classification of Sciences*, op. cit. 1. 203-283. (35) *ibid.* 1. 250.
- (36) J. K. Feibleman, op. cit. p. 179. cf. *ibid.* pp. 177-195.
- (37) Peirce, *The Logic of Continuity*, op. cit. 6. 185-6. 213.
- (38) *ibid.* 6. 192.
- (39) C. W. Morris, *Six Theories of Mind*, op. cit. p. 286.
- (40) Peirce, op. cit. 1. 270. cf. *ibid.* 1. 253, 1. 265, 1. 615.
- (41) (42) C. W. Morris, Peirce, Mead and Pragmatism, op. cit. p. 121.
- (43) Peirce, op. cit. 5. 196.
- (44) Mead, MSSS. pp. 1-41. cf. *ibid.* Introduction by C. Morris. p. xiii ff. ミートはロイスのもつて字ひ、タルト、ホールト、ウイネに初期に影響を受け中期からギイディング、クローリーに社会心理学および社会学の見地に強く影響を受ける。ミート

- にウイネの平行論、ワトソンの行動主義の心理学の影響、フランク・アイズムからはシェーアスの心理学の影響を受けている。
- (45) J. B. Watson, *Behavior, an Introduction to comparative Psychology, Behaviorism*.
- (46) J. B. Watson, *Behaviorism*. 1930 (revised)
- (47) MSS. part 1. II. (48) *ibid.* p. 3. p. 8.
- (49) *ibid.* p. 6.
- (50) C. W. Morris が「MSS」の序で名付いた。 *ibid.* p. xviii.
- (51) *ibid.* pp. 10-11. (52) *ibid.* p. 164.
- (53) *ibid.* pp. 1000-109. (54) *ibid.* p. 55.
- (55) cf. MTNC, chapter 1. chapter v III.
- (56) Mead, *Cooley's Contribution to American Social Thought*, op. cit. George Herbert Mead on social Psychology, pp. 293-307. Cf. C. H. Cooley, *Social Organization 1902, Human Nature and the Social Order*. 1922.
- (57) MTNC. chapter VIII.
- (58) MSS. p. 81. ミートと gesture の triadic relation をみる。記号の三段階区分は次の論文を参照 C. W. Morris, Peirce, Mead and Pragmatism. op. cit. p. 116 ff.
- (59) MSS. p. 6. p. 47. (60) *ibid.* p. 61 ff.
- (61) *ibid.* pp. 47-48. (62) *ibid.* pp. 68-75.
- (63) ペースの記号論は二つのレベルの概念 Firstness, Second-

ness, Thirdnessからくる記号の区分を考えている。区分表については次の論文参照 Peirce, Elements of Logic. chapter 2. Division of Signs, op. cit. (2. 227-2. 272)

- (64) PA. pp. 3-25. ミートはそこで行動の段階を次のように分けている。Aは行動の段階 the stage of impulse. (動物の刺激と反応との機能としての段階)である。次の段階が実際上の高次に組織化された有機体の行動としてとりあげられる。Bは知覚の段階 (the stage of perception) 、Cは操作の段階 (the stage of manipulation) 、Dは行動の完了の段階 (the stage of consummation) としての行動の三段階がとりあげられている。
- (65) Peirce, Elements of Logic, op. cit. chapter 2, chapter 3. それにおいて三分の区別の区別がとりあげられている。cf. J. J. Fitzgerald, Peirce's Theory of Signs as Foundation for Pragmatism. A. W. Burks, Icon, Index and Symbol, Philosophy and Phenomenological Research, vol. 9. 1949. (68) Cf. MTNC.
- (67) C. W. Morris, Six Theories of Mind, op. cit. p. 285.
- (68) Peirce, op. cit. 2. 227.
- (69) The phenomenological categoriesに対応するものとして Firstness, Secondness, Thirdness がまずうちたてられる。The Metaphysical Categories に対するのが possibility,

existence, law がうちたてられている。それらから記号論が演繹されている。

- (70) そこにはアメリカ思想の伝統との関係からアプロウシしなければならぬ問題が残されている。つまり超絶主義 (transzendentalism) 以来の諸々の観念論との関係とのつながりが考えられると思う。cf. J. L. Blau, Men and Movements in American Philosophy, 1952.
- (71) C. W. Morris, Peirce, Mead and Pragmatism, op. cit. p. 112ff.
- (72) Peirce, op. cit. 5. 397. (73) (74) ibid. 5. 394.
- (75) ibid. 5. 314. (76) ibid. 5. 397.
- (76) Peirce, Issues of Pragmatism. op. cit. 5. 438-5. 444. What Pragmatism Is. op. cit. 5. 428.
- (78) PA. part II. Manipulatory Phases of the Act. p. 104ff. まづにあげた行動の三段階に対応して考えられる。PAの構成のそれ方がそれに対応する。part I. General Analysis of Knowledge and the Act. part II. Perceptual and Manipulatory phases of the Act. part III. Cosmology.
- (77) ミートはベークリー的な知覚の世界に足がかりなきをよりから科学的操作による仮説構成を考えている。Cf. Mead, Bishop Berkeley and his message, The Journal of Philosophy, XXVI 1929. pp. 421-30. まづに PA において自然科学

学一般のもつ性格が詳細に論じられている。cf. PA. part II.

(78) MTNC. p.168.

(四) 註

(1) 以下三つの区別はミードの著書に対応している。

第一のものには『精神自我として社会』(MSS)、第二のものには『行動の哲学』(PA)、第三のものには、『現在の哲学』(PP)° ibid,

(2) MSS. pp.150-164. (3) PA. p.186.

(4) MSS. p.154. (5) ibid. p.197.

(6) ibid. pp.303-311.

(7) ibid. 167, pp. 229-230.

(8) I と me との関係については次の箇所を参照。

MSS. pp.173-78, 192-200, 209-213, 273-281.

PA. pp. 176-195.

(9) MSS. p.176. (10) ibid. p.177.

(11) ibid. p.199. (12) ibid. p.199.

(13) ibid. p.143ff.

(14) MSS. pp. 245-252 pp. 260-273.

(15) ibid. pp.303-310. PA. pp. 176-195.

(16) MSS. p.174.

(17) cf. D. Victoroff, La notion d'emergence et la catégoerie

du social dans la philosophie de G. H. Mead, Revue Philosophique, Tome. 142, 1952, pp. 555-562.

(18) MSS. pp.245-252.

(19) dynamic method はミードの『MTNC』全体がふつがえ。 cf. PA. Introduction by C. W. Morris, pp. xlv-1.

(20) cf. MTNC, pp. 127-52 pp. 150-151. pp. 196-197. pp. 312-313. PA. pp. 523-548.

(21) PA. supplementary essays, chapter IV. The Objective Reality of Perspectives, pp. 161-175. cf. Maurice Natanson, George H. Mead's Metaphysics of Time, The Journal of Philosophy, vol. 50, 1953, pp. 770-782. Frank M. Doran, Remarks on G. H. Mead's Conception of Simultaneity, vol. 55. 1958, pp. 203-209.

(22) PP. p.1. (23) ibid. p.12.

(24) PA. p.353. (25) PP. p.31.

(26) PA. p.640. (27) PP. p.49, p.51, p.76.

(28) ibid. p.47ff. (29) ibid. p.49, p.76.

(30) temporal relationism はミードの参照。

Maurice Natanson, George's Mead's Metaphysics of Time, op. cit. p.781.